

忌み子花嫁は
鬼の頭領の溺愛を知る
わたしを「殺した」のは、鬼でした
狭山ひびき Hibiki Sayama



アルファポリス文庫

目次

忌み子花嫁は鬼の頭領の溺愛を知る
わたしを「殺した」のは、鬼でした

005

番外編一 初夏の贅沢

195

番外編二 記念日

209

忌み子花嫁は鬼の頭領の溺愛を知る

わたしを「殺した」のは、鬼でした

プロローグ

五年前——妹が生まれたその日から、予感はしていた。殺されるか捨てられるか。おそらく、わたしに待ち受けている運命はそのどちらかであろうと。

暗い暗い夜の闇。

自分の背丈ほどしかない小さな祠ほこらの前で、膝を抱えてうずくまる。

——わたしはもうじき、死ぬのだろう。

それは、「破魔家」の家に生まれながら無能として生きるわたしには、当然の帰結だったのかもしれない。

☆

わたし——道間ユキが「破魔」の家系である道間家に生を受けたのは、今から十五

年ほど前のことだ。

赤子だったので覚えていないが、産み落としたわたしを見た母は悲鳴を上げ、父は代々当主に受け継がれる破魔の力がこもった太刀の切っ先を産声を上げるその喉元に突きつけたという。

道間家は、破魔家と呼ばれる魑魅魍魎ちみもつりょうを祓はらう一族だ。

一家の起りは、遡さかのぼること江戸時代。

先祖をたどれば平安時代。

物の怪けや鬼と言った「悪しきもの」を祓なぐさむことを生業なまわいとする道間家において、尊とうとぶべきは「黒」だった。

同時に、それ以外の色を、「鬼の呪い」と呼び忌み嫌う。

——わたしは、生まれながらにして髪が少し生えていたそうだ。

そして、その色は「赤」だった。

正確には、赤みの強い茶色。

ゆえに父はわたしを斬ろうとし、けれどもギリギリで踏みとどまった。

それは、わたしが父の長子であり、体の弱い母が二人目を望めるかどうかかわからなかったからだと聞く。

父はわたしを「鬼の呪い子」と呼び、我が子と口にすることはなかった。

母はわたしのような子を産んだ衝撃で心を病み、その存在を頭から否定した。わたしは道間家の離れて乳母によって育てられた。

忌み嫌われる容姿であろうと、道間家の血は絶やせない。

そのまま母に次の子ができなければ、わたしは次代の「子」を産む道具として使われるのだろうか……子供ながらに、漠然とそう思っていた。

さらに父を絶望させることに、わたしは道間家に生まれながらにして、「無能」だった。

魑魅魍魎を祓う力のない、ただの人間。

それを知った父は、何があっても次の子をと思ったのだろう。心を病んだ母を療養という名目で別邸に追いやり、妾めかけを持った。

そして……わたしが十のときに、妹が生まれたのだ。

「黒」を持って生まれた妹に、父は狂喜乱舞した。

その瞬間。

わたしは子を産む道具としても父から不要とみなされたことを理解した。

赤子のころに死を免れたものの、近いうちに「処分」される、と。

それでも十五まで生かされたのは、妹がある程度大きくなるまで様子を見るつもりだったのかもしれない。

幼子が死ぬのはよくあるから、保険のつもりで残したのだろう。

妹が五歳になり、強い破魔の力を宿していると知った父は、ついにわたしを「処分」することに決めたのだ。

斬られると思っていたけれど、父はわたしを捨てることにしたようだ。

もつとも、斬られても捨てられても、待ち受ける運命は同じ。

「……こんなときでも、お月様は綺麗ね」

闇色に染まった木の葉の間から、金色の満月がわたしを見下ろしている。

なぜ、わたしはこんな赤茶色の髪で生まれてきてしまったのだろうか。

物心ついたときから幾度と自問し、答えがないことを理解しているのに、またそんなことを考えた。

わたしの髪が黒であれば、たとえ破魔の力を持たずとも捨てられることはなかっただろう。

無能だとしても、産む子までそうだとは限らない。

過去には無能の母から強い力を持った子が生まれたこともあり、道間家では能力を持たない娘も、次代の「母体」として丁重に扱われる——色が黒であれば。

だからこの髪が黒であれば、きっとそれなりにわたしも可愛がってもらえただろう。

母も心を病むことはなかった。
わたしはそっと自分の髪に触れる。
ろくに手入れをしていないために手触りが悪く、ごわごわしてちっとも綺麗ではない。

離れに閉じ込められ、座敷牢のような小さな部屋の中でただ生かされていただけのわたし。

それでも、屋根のある部屋にいられただけかもしれません、はあ、と白い息を吐き出しながら思った。

飢えるのが先か、凍え死ぬのが先か。

冬の山の中だ、凍えるほうが先だろうか。

いつの間にかはらはりはらりと舞い落ちはじめた雪に、わたしはつい、自分の名前を囁く。

ユキ……漢字を当てれば「幸」だそうだ。

親に名を付けてもらえないわたしを、憐れんだ乳母はそう呼んだ。

いつの間にかその名が定着し、名付けなかったという事実など忘れて、父は娘の名を「ユキ」とした。

幸……忌み嫌った娘にその名が付けられたことに、何も感じなかったのだろうか。

感じなかったのだろう。

父の中で、わたしの存在はどうでもいいものであるに違いないから。

それにしても、冬の山は暗い。

帝都の夜はガス灯が煌々としていているけれど、周囲に民家のない山奥で頼れるのは月明かりだけだ。

その月も、ゆっくりと漂う雲に覆われ、気が付いたら見えなくなっていた。

……わたしは明日の朝まで生きていられるかしら？

膝を抱えてうずくまり、そっと息を吐く。

どうせ死ぬのなら早めに死んだほうが苦しまない。

わかっているのだが、人間というものは、死が目前に迫っていても、生にしがみつきたくなる生き物なのかもしれない。

あと少し、少しだけ、生きていたかった——

わたしにこの名を付けてくれた乳母が願ったように、死ぬ前に「幸せ」というものを知りたかった。

乳母が去り、ひとりぼっちになった離れの中でずっと願った、わたしの「幸せ」。誰でもいい。

わたしを必要としてくれる人に、出会いたかった……

寒さのせいかな、意識がとぎれとぎれになりはじめていたわたしの耳に、がざりと落ち葉を踏むような音が聞こえた。

ほんやりしながら膝の間から顔を上げ、ぱちりぱちりと緩慢に瞬く。

一瞬、お月様が落ちてきたのかと思った。

だが、それはすぐに勘違いだとわかる。

目の前に現れたのは、月のように綺麗な金色の髪に赤紫色の瞳をした背の高い男性だった。

白に赤い紅葉もみじの模様が美しい羽織まじを纏い、腕を組んでじつとわたしを見下ろしている。

その目は驚くほど伶俐れいりで、同時に、わたしをひどく憎んでいた。

……鬼。

彼は「鬼」だ。

すぐにそれを理解した。

腐っても破魔の家系に生まれた者だからだろうか。

人となら変わらない外見をしている彼が鬼のだと、直感が告げている。

はじめて見る鬼。

おそろしく冷ややかで怖いのに、このときわたしは、ただただ彼のその伶俐れいりさが美しいと、そう思った。

「……道間の、女狐か」

うずくまったわたしに、彼は忌々いまいましそうに言う。

女狐なんてはじめて言われた。

なんの力もないちっぽけなわたしに「女狐」なんて呼ばれるとは――

その言葉が決して誉め言葉ではないことはわかっていただけけど、なんだかおかしくなる。

彼はわたしを、道間の人間として警戒しているのかもしれない。

魍魎おにを祓う力がなく父から忌み嫌われていたわたしを警戒する必要は、どこにもないのに。

「……ふふ」

「何がおかしい」

「いえ……」

寒さで頭の動きが鈍くなっているのかもしれない。

この状況で笑えた自分に驚くと同時に、ああ、それもそうかと得心する。

――ひとりで死に逝く定めだと覚悟していたのに、誰かに看取みとられる……たとえそ

れが、わたしを憎んでいそうな鬼だとしても、嬉しいのだ。

笑いながら、意識が朦朧もうろうとしていくのがわかる。

ほんやりしている間に、周囲にうつすらと雪が積もりはじめていた。

「……死ぬのか」

わたしの様子を眺めながら、鬼が軽く目を見張る。

そんな顔をしていても、やっぱり綺麗……

鬼は人を惑まどわすために美しい顔かんぱせをしていると聞いたことがあるけれど、まさしくその通りだ。

鬼の呪い子と呼ばれたわたしが鬼に看取られて死ぬとは、ちょっと変で面白い。

ゆっくりと目を閉ざすと、体を支えられなくなって、うずくまった姿勢のままこてんと横に倒れた。

ずっと凍えるような寒さの中にいて、限界に来ていたようだ。

「死ぬのか」

鬼は一步わたしに近づいて、もう一度つぶやいた。

薄く笑おうとしたわたしのそばに、膝をつく。

そしてゆっくりと手を伸ばして、わたしの首に指を巻き付けた。

軽く力が込められて、わたしは完全に目を閉じる。

死に逝くわたしに、止めを刺してくれるのだろうか。

殺されそうになっているのに、なぜかそのことに安堵あんどしてしまう。

このまま鬼が立ち去ってひとり死を待つよりは、彼の手にかかるほうがまだと、わたしはそう思ったのだ。

徐々に徐々に力が込められていく。

すでに朦朧もうろうとしているからか、あまり苦しさは感じない。

「……死ぬのなら、俺の手で殺してやろう。道間」

それが「道間ユキ」として聞いた、最後の言葉だった。

鬼の隠れ里

——ぼかぼかと暖かいのが不思議だった。

ほんやりと臉まがたを持ち上げたわたしは、そのまま何度か目をしばたたく。

……ここ、は？

ふわりと肌に触れるのは、柔らかくて温かい布団の感触だった。

パチパチと火が爆ぜるような音がする。首をめぐらせると、両手で抱えられないほど大きな火桶が置いてあった。

火の爆ぜる音は、そこからしているようだ。

火桶のおかげか、布団か。それともその両方か。

先ほどまで凍えていたはずのわたしは、まるで春の日差しに包まれているかのように暖まっていた。

……ええっと。

記憶がつかなくなくて、布団に横になったまま首をひねる。

ここはどこで、わたしはどうして眠っていたのか。

確か、父の命令を受けた道間家の使用人に山奥に捨てられたはずだった。

彷徨さまよい歩いているうちに小さな祠を見つけて、そこで膝を抱えて自分に訪れる死を待っていたのだ。

そして、綺麗な鬼に会った。

……そうよ、わたしは鬼に殺されたはず。

殺されたというよりは、情けをかけてもらったのほうが正しいのか。

舞い落ちる雪に埋もれながら徐々に命の灯が小さくなっていくわたしを、彼は一思いに殺してくれようとしたのだ。

最後に、首にかけた鬼の指にぐっと力がこもったのを感じた。

それから記憶が途絶えているのだが……順当に考えれば死んだはず。

それが、ここで寝ているのはどうしてだろう。

ここは死後の世界なのだろうか。

横になったまま考えているところに、すっと襖ふすまの開く音がした。

首をめぐらせると、牡丹ぼたんの絵柄の襖の奥に鬼が立っている。

わたしを殺した——いや、殺そうとした？ 鬼だ。

死んだのか、死んでいないのか。

自分のことなのによくわからなくて、わたしはただただじっと彼を見つめた。

明るところで見ても、やっぱり綺麗だ。ぐっと眉を寄せた不機嫌な顔で、畳の上を歩いてくる。

そしてわたしの枕もとで、腕を組み仁王立ちになった。

このまま寝ているのは失礼な気がしたので上体を起こし、布団の上に正座をして彼に向き直る。

「あの……」

「お前は死んだ」

戸惑うわたしに、彼は冷やかな声で告げた。

わたしがばちりばちりと瞬くと、布団の横に胡坐あぐらをかいて座る。

何も理解できていないわたしは、いったい何を訊きねていいのかもわからなかった。ただ瞬きを繰り返す。

そこで彼が一つ息を吐いた。

「道間……いや、もう道間ではないな」

道間で、ない？

それはわたしが道間家から捨てられたからだろうか。

それとも、他に意味があるのだろうか。

やっぱり何も言えないでいるわたしに、彼は端的に訊ねた。

「名は？」

「……ユキ、と呼ばれておりました」

「そうか。では、ユキ。お前は、死んだ」

「……………さようで、ございますか」

たっぷり沈黙して、理解できないまま頷うなずく。

彼は形のいい眉を跳ね上げて、じろりとわたしを睨にらんだ。

「理解しているのか？」

「いいえ、理解しておりません……」

けれど、それを訊ねていいものかすら判断できない。

道間家では、わたしは「問う」ことを許されなかった。

疑問を抱くことも、それに否いなを唱えることも、何一つ許されてこなかった。そんなわたしにとって、訊ねるといふ行為はひどく戸惑いをもたらす。

悩み、惑って、おずおずと問いではなく「確認」を入れることにした。

「わたしは、死んだのでございますね」

彼はそっと息を吐き出した。

そして、吐き捨てる。

「変な女だ」

決して誉められていないのはわかっているけれど、その言葉がわたしを傷つけることはなかった。

無用なものとされ、存在ごと打ち捨てられていたわたしにとって、変と表現されることは小さな感慨をもたらす。

そう評されるということは、すなわちわたし自身を「表現」しているのだ。

わたしを、見て、感じてくれていている証なのだ。

彼の綺麗な赤紫色の瞳に、わたしが映っている。

感動せずには、いられない。

「お前は死んだ」

彼は同じ言葉を繰り返す。

「俺が殺した。そしてお前は人の理ことわりから外れた」

彼はわたしの首元に手を伸ばす。

指先が触れ、何かを確かめるように滑った。

ちよつとだけ、くすぐつたい。

「お前はもはや道間ではない。——お前は、鬼だ」

わたしは大きく目を見開いた。



「お館様、『あれ』をどうするおつもりですか？」

青葉が不可解そうな顔を向ける。

暁月千早——この「鬼の隠れ里」を統括する「お館様」である彼は、脇息きょうでくに軽く

寄り掛かりながら、視線だけを青葉に向けた。

「どう、とは？」

「……いえ」

千早の声は静かだ。

けれど彼が返答した途端、青葉は蒼白になり視線を落とした。どうやら、無意識のうち威圧していたようだ。

ふう、と息を吐き出し千早が漏れ出ていた妖気を抑えると、青葉が細く息をつく。

青葉は、父が死に鬼の頭領の座を継いだ百年前から千早の側近だ。

付き合いはそれ以前に遡り、生まれたのが同じ時期だったため、幼いころから常にそばにいた男でもある。

鬼という種族は、完全に縦社会だ。

力ある者が一族を束ね、力なき者は力に従う。

立場的には従兄弟にあたる青葉がなんの異論も唱えずに千早に従っているのは、二人の力の差が明白だからだ。

この隠れ里の中で、千早に勝る鬼はいない。

だから、いつもであれば青葉は千早に疑問を投げかけることすらしない。

けれども、その行動がよほど引かかったのだろう。珍しく、千早が連れてきた女を「どうするのか」と訊ねてきた。

(どうするのか、か)

正直なことを言えば、千早もそれを決めかねていた。

先ほど連れてきて、自分の邸の一室に寝かせておいた「女」——道間の娘。

山の中で見つけたとき、千早は確かに彼女を殺そうと思っていた。

放置しても死にそうなほど弱っていたが、百年前に父を殺した道間に対する恨みはまだまだ根深い。

人の一生は短く、あの女はそのときの道間の女狐ではなく未裔だが、そんなことは千早には関係のないことだ。

そのままでも死にそうなのに、この手で鬪り殺しにしてやりたいという攻撃的な感情に支配され、千早は女の前に立った。

——だというのに、なぜ、その考えが変わったのだろう。

自分でもよくわからない。

もしかしたら、見下ろした女に道間らしさがなかったからかもしれない。

女は何がおかしいのか儂く笑い、そして目を閉じた。

ああ、死ぬのだなと思った。

死ぬのか、という千早の問いかけに返すこともなく、諦観めいた無に近い表情で、

ただただそのときが来るのを待っているように見えた。

女の首に手をかけたのは気まぐれだった……のかもしれない。

なぜかもう少し見ていたいと思った。

同時に、自分たちこそ崇高であると信じて疑わない道間を、その女を、「汚して」

やれば——女はどんな表情を見せるのだろうかとおかしな興味を湧いた。

汚して、道間が忌み嫌うものと同じモノに墮としてやれば、目の前で壊れるだろうか。

それはそれで見世物としては一興かもしれない。

鬼らしい残酷的な考え方で、千早は女の首を絞めた。

「お館様……」

「しばらく、あれは俺が見る。手は出すな」

あの女がどんな鬼に変質したのかは知らないが、もともとそれほど力はないように

見えた。他の鬼にいびられればすぐに死ぬだろう。

せつかく拾ったおもちゃだ、すぐに殺すのは面白くない。

青葉は何か言いたげだったが、千早はそれを無視して立ち上がる。

そろそろ、あの女が目覚めるころだろう。

(そういえば、あれの名を知らない)

あれはもう道間ではない。ならば名を確かめておかなくては。いつまでも「女」と困る。

何が困るのかはよくわからなかったが、千早は言い訳めた理由をつけて女に名を確かめてみようと思った。

青葉をその場に残し、女が寝ている部屋へ向かう。

部屋に入ると、やはり女は目覚めていた。

抱きかかえて運んできたときにひどく体が冷えていたので部屋を暖めさせたが、やりすぎただろうか。

暖かいというより、少し暑い。

襖を始めて近づいていくと、女は緩慢な動作で瞬きを繰り返し、それから布団の上に正座をした。

状況が理解できていないのだろう、不思議そうな、困ったような、そんな顔をしている。

拾ったときは薄汚れていたのが気付かなかったが、よくよく見ると、なかなか顔立ちの整った女だ。汚れを落とせばそれなりに見られる顔になるだろう。

この女をどうするか決める前に、少し擲揄^{かつか}ってみることにする。

「お前は死んだ」

普通の人間なら狼狽^{うろた}え取り乱すだろうことを言っても、女は戸惑いを見せるだけだった。

不思議な反応だなど思いつつ、千早は布団のそばに胡坐をかいて座る。

名を訊ねると、「ユキ」と返ってきた。

その名を呼び、「お前は死んだ」と繰り返しても、ユキはやはり戸惑いを見せるだけだ。

そして、「さようで、ございますか」と、わかっているのかいないのか、そのような返事をよこす。

「変な女だ」

思わず感想が口を突いて出たが、ユキは怒らなかつた。

それどころか、どこか喜んでいるような顔をしたので、また「変な女だ」という感

想を抱く。

(この女はいつたいなんなんだ?)

道間の女だ。

道間の者だった女だ。

千早の知る道間は、目の前の女とは真逆の性質を持った苛烈かれつな人間たちのはずである。

自分たちの都合のいい「正義」の名のもとに、異形を喰いながら罅り殺す、そんな者たちだ。

千早は、そんな道間の女が壊れるところを見てみたかった。

「俺が殺した。そしてお前は人の理から外れた」

望んでいた反応が返ってこないで踏み込んだことを告げても、やはりユキは千早が望んだ反応を見せない。

「お前はもはや道間ではない。——お前は鬼だ」

どうしてこの女は反応しないのだろう。

釈然しやくぜんとしないものを感じつつさらに言葉を重ねると、ユキは細く息を呑んだ。

だが、やはりそれだけだった。

少し苛立いらだった千早は彼女の細い肩を押し、褥しとねの上に押し倒す。

至近距離で睨み付け、そして嗤ってやった。

「鬼に汚された気分はどうだ?」

さあ、わめけ、泣き叫べ。

——俺は道間が壊れるところが見たいのだ。

☆

さらりと艶やかな金色の髪が一房、わたしの頬に触れた。

それほど長いわけでもない前髪が触れるくらい近くに、鬼の綺麗な顔がある。

わたしに覆いかぶさっている彼は冷ややかな笑みを浮かべ、その綺麗な赤紫色の瞳には値踏みするような光が宿っていた。

……気分は、どうか?

そんなことを訊ねられたのははじめてだ。

道間家では、わたしの気分なんて誰も気にしない。

初対面の彼がどうしてわたしにそこまで心を割くのがわからなかった。

彼によると、わたしは鬼になったらしい。

そう言われても、違いがあるのかよくわからない。

わたしの気分を伝えるには、まず、自分が何に変質したのかを知るべきだろう。「鬼になったようですが、わたしは何が変わりましたか？」

それは、久しぶりに口に載せた疑問だった。

そのあとで、問うてよかつただろうかと不安になる。

だけど鬼はわたしの問いに気分を害した様子もなく、ただ意外そうに眉を上げた。

「その問いが姿かたちを問うているのなら、変化はない」

「そうでございますか」

「ただ、先ほども言ったが、お前は死んだ。もはや人ではない」

「はあ……」

わかるような、わからないような。

死んだと言われたけれど、実際にこうして生きている。

どうということなのだろう。

「……お前は本当に道間か？」

「生まれは道間家で間違いございませんよ。ただ、『破魔家』としての意味で問われているのならば、わたしは道間ではありません。わたしは無能の忌み子ですから」

無能だけなら忌み子と呼ばれることはなかっただろうが、わたしはこの色を持っている。

ゆえに、道間であつて道間でない。

子を産む道具としてすら使われる予定がなくなったのなら、わたしはただの忌み子だ。

「……なるほど、無能、か。道理で違和感があるわけだ」

鬼はそつと息を吐き、わたしの上からどいた。

起き上がっていいものかどうか判断がつかなかったので、わたしはそのままの体勢で首をめぐらせる。

「先ほどの質問に答えよう。外見的な変化という意味であれば、お前に変化はない。だが、肉体的な変化という意味であれば大きく違う。……鬼は、千年生きるからな」

「え……?」

「そもそも、鬼という種族は、神の亜種だ。人の理でも、神の理でも生きられない存在、それが鬼である。お前たち道間は俺たちと魑魅魍魎を同列に考えるが、それがそもそも間違いだ。魑魅魍魎は幽鬼ゆうきの類たぐいであり、あれらには寿命というものがない。まったくの別物なのだ」

「ええつと、つまり……」

「本来であれば、人であるお前は死ぬと同時に黄泉よみへ下るか、幽鬼となるかのどちらかだった。俺がそれを無理やり鬼に変質させたのだ。ゆえにお前は人の生を終え、鬼

となつた。理解できたか？」
わたしを見る視線は相変わらず冷やかかなのに、彼はとても丁寧な状況を教えてくれた。

教えてくれたが——やっぱり、すぐに理解できるものではない。

……なんでこの人は、わたしを鬼にしたの？

そんな疑問が顔に出ていたのだろうか。彼はふんと嗤い、ちよつとだけ機嫌がよさそうに口の端を持ち上げた。

「お前をここに連れてきたのはただの気まぐれだ。気まぐれゆえ、お前の命を刈るかどうかも俺の気分次第。せいぜい俺の機嫌を取ることだな」

わたしはわかつたようなわからないような腑に落ちない気持ちで、上体を起こして頷いた。

「つまり、わたしはあなた様にお任せすればよいのですね。どうぞ、よろしくお願ひいたします」

鬼は虚を衝かれたような顔をして、しばらく目を見張つたまま動かなくなつた。

鬼は暁月千早様というらしい。

千早様とお呼びする許可を得て、わたしは彼の下女になつた。

状況はいまだよく読めないが、人の生を終えたわたしはここで生きていくしかない。生きるも死ぬも千早様の気分次第だというのなら、彼に仕えるのは当然だろう。

ここは、鬼の隠れ里と呼ばれる場所だそうだ。

現世うつしよと常世とこよの狭間はざまにある異空間だと聞いたもののよくわからなかつたので、深くは考えないことにした。

鬼というのが神の亜種だというのなら、人として生きていたわたしには理解できない部分が大きいはずだから。

「おはようございます、千早様」

わたしは千早様の寝室の襖を開き、三指をついて頭を下げた。

千早様の邸は広い。

彼は鬼の頭領であるそうなので当然だ。

そして当然、多くの下女を抱えている。

それなのになぜか、千早様は新参者のわたしに身の回りの世話をするように申し付けられた。

鬼の暮らしの勝手がわからないわたしでは迷惑になるだろうに、かまわないらしい。心が広い方だ。

そう口にする、ものすごく嫌な顔をされた。

朝になったので千早様を起こしに行く。
彼は褥の上につぶせの状態で眠っていた。

「千早様、朝でございますよ」

返事がなかったのでお部屋に入って枕元で呼びかける。だけど、健やかな寝息しか返ってこない。

千早様は朝が弱い。

逆に夜は強いようで、いつも遅くまで起きている。

早く眠るようにすれば朝の目覚めもすっきりするだろうにと思うが、千早様の側近の青葉様によれば、早く寝てもやっぱり朝は弱いらしい。

青葉様は千早様の下女になった新参者のわたしに最初は厳しい目を向けていた。

それが半月ほど経ったころにはわたしへの警戒が解けたのか、今は普通に接してくれるようになってる。

自身のことを多くは語らない千早様について、いろいろ教えてくれるのも青葉様だ。

彼は千早様のことをとでも尊敬しているようである。千早様はきつとよき頭領なのだろう。

「千早様、朝餉が冷めてしまいますよ」

朝餉が冷めると千早様の機嫌はとでも悪くなる。

だから必死に起こしているのに、反応が返ってこない。

仕方がないので、無礼と知りつつもその肩に触れた。

「千早様」

軽く揺さぶってみる。

すると、千早様が寝返りを打ち――

「えっ!？」

気が付くと、わたしは千早様の腕の中に抱き込まれていた。

すーすーと寝息が聞こえるので、まだ眠っているのは間違いない。

……どうしましょう。

これは困った。

身じろぎするも、彼は力が強いので、自力では腕から抜け出せない。

すっかり抱き枕にされたわたしは、千早様の腕の中で必死に朝だと伝える。なのに、やはり一向に起きる気配はなかった。

とくとくと千早様の鼓動の音がする。

彼は鬼だ。

鬼も人と同じように心の臓が鼓動を打つのだなど面白く思っているうちに、足音が聞こえてきた。

「お館様……あ……」

どうやらいつまでも起きてこない千早様に業を煮やして、青葉様が様子を見にきたようだ。

千早様に抱き込まれているわたしを見て額に手を当てる。

「ユキ、眠っているお館様には不用意に近づくなと言っただろう」

実は、千早様を起こしに行つてこの状況に陥るのははじめてではない。これで三日だ。

毎回、青葉様に救出されているわたしは申し訳なくなりつつも、遠くから声をかけただけでは起きてくれないのにどうしたらいいのだろうかとう途方に暮れた。

今日も今日とてわたしを千早様の腕の中から救出した青葉様が、どこから取り出したのか、鍋とお玉を掲げ持ち、「カァン！」と大きく音を立てる。

「さあ、起きてください、お館様!!!」

嫌そうに眉を寄せて臉を上げた千早様を見て、青葉様はやっぱりすごいと、わたしはただただ感心していた。

暮参り

「髪を整えろ」

わたしが鬼の隠れ里で暮らすようになってひと月あまりが経ったころ、千早様が突然そのようなことを言った。

……ええっと、千早様の御髪を整えろと、そういうことでございましょうか？

千早様の髪は、いつも艶やかで美しい。今も一分の乱れもないように見えるのに、千早様からすれば乱れているのだろうか。

わたしは着物のあわせから、「必要なときに使え」と渡されていた柘植の櫛を取り出す。

このひと月あまり出番のなかったものだが、ついに使用する場面ができたようだ。櫛を手にも、畳の上に敷いた円座の上に気だるげに座っている千早様の背後に回ろう

とすると、手首を掴まれた。

「何をしている」

「御髪を整えろとおっしゃったので……」

「違う」

千早様は形のいい眉をぐぐつと寄せた。

これは機嫌が悪い時の仕草だ。どうやら、何か機嫌を損ねることをしてしまつたらしい。

「お前のことだ。いい加減、髪を整えろ。いつまで経っても放置したままで、見苦しいぞ」

そう言われて、わたしはハッと己の髪を押さえた。

見苦しくならないように一つにひつつめていたものの、見る人が見れば、伸ばしたまま放置している残念な状況に気が付くものらしい。

千早様から寝る場所とお風呂には自由に入つていいと許可をもらっているので、身綺麗にはしているつもりだった。

艶がなくなっていた髪にも心なしか艶が出たし、前ほど悲惨な状況ではなくなつたので大丈夫だと思つていただけ、綺麗な千早様の目には見苦しく映つていたのだらう。

「申し訳ございません。すぐに切り落としますので……」

「待て、どうしてそうなる。俺は整えろと……ああ、もういい」

千早様は背立たしげに舌打ちして、掴んでいたわたしの手首をぐいっと引く。

それと同時に立ち上がり、ご自分が座っていた円座の上にわたしを座らせた。

「あの……?」

「そこにいろ」

そう言つて、わたしをぼつんとその場に残したまま部屋から出ていく。

よくわからないけれど、「そこにいろ」と命じられたのだからここにいななければならない。

栢植の櫛のつるりとした面を指先で撫でながら待つっていると、千早様がハサミを持って戻ってきた。

わたしの背後に回り込み、髪をまとめていた紐をほどく。長い髪がすんと背中に落ちた。

「千早様?」

「動くな」

命じられたので座ったままじっとする。

しゃきしゃきと背後で音がする。

どうやら髪が切られているのだとわかった。

けれど、どうして千早様が切っているのだろうか。

しばらくすると、後ろの髪を切り終えたのか、千早様が前に回り込んでくる。

少し顔を動かした直後にまた「動くな」と命じた。言われるままわたしは顔を正面に固定する。

千早様のしなやかな指が、わたしの醜い髪みにくに触れている。

それがものすごく申し訳なくてしょんぼりしていると、前髪を整えていた千早様が不思議そうな顔をした。

「なぜそんな顔をする」

「……わたしの、このように醜い髪みにくに触れていただくのが、申し訳なくて……」

素直に心の内を吐露とろすると、彼はわたしの髪を切る手を止める。

「どういう意味だ」

「わたしの髪は醜いのです。赤茶けた色で、あまり艶つやもありませんし……」

「なるほど、道間は黒を尊ぶからな」

千早様は一つ頷いて、作業を再開した。

「お前がどう思おうと勝手だが、ここではお前の髪を醜いと言う者はいない。それに、艶つやがないのが嫌なら椿油つばねあぶらでもつけていろ」

簡単に言うけれど、椿油は高級品だ。そのようなものをわたしが使わせてもらおうのはおかしい。

「俺には女の必要なものはよくわからん。あとで青葉あおばに細々こまごまとしたものを運ばせて

おく」

「い、いえ、わたしは……」

「動くなど言っただろう」

「……はい」

ここでは、千早様の言葉は絶対だ。彼がそうすると言ったことにわたしが口を挟むのは無礼である。

だけど、千早様の気まぐれに生かされている下女のわたしが、このように優しくしてもらってもいいのだろうか。

「こんなものか」

しばらくわたしの髪を切っていた千早様が、ハサミを置いて頷いた。

「これで少しは見られるようになったな。——青葉」

その呼びかけに、どこからともなく青葉様が姿を現す。

声は決して大きくなかったのにすぐにやってくるなんて、青葉様は大変有能である。「なんでございましょう」

「片付けておけ」

ぱいっとその辺にハサミを投げて千早様が言う。

青葉様はわたしと、それから散らばったわたしの髪を見て、ぐぐつと眉を寄せた。

「……次はせめて庭で切っていただけだと、大変助かります」
その後、わたしには風呂に入ってくるようにと告げて、青葉様は箒と塵取りを取りに行った。



あちこちに髪の毛をつけたユキが、青葉の指示に従って風呂に入るために部屋を出ていく。

それを見るときもなしに見ていると、青葉がはあ、と息をついた。

「お館様、ユキをどうするおつもりですか」

以前、同じようなことを訊かれたなと思いつつ、千早は片眉を上げる。

「なんだ。髪を切ったのが気に入らないのか？」

「気に入らないわけではありません。ただ、いささかお館様らしくない行動のように思いました」

(らしくない、か)

言われてみればそうかもしれない。

千早は使用人がどのような格好をしていようと、いちいち気に留めるような性格で

はない。

だが、どうしてかユキの髪が気になった。

いや、理由はわかっている。

道間に生まれながら道間らしくないユキの、なんの手入れもされていない髪がずっと気になっていた。

だから整える道具がないのかと思つて櫛をやつたのに、それが使われた形跡はない。せつかく与えてやったのにと面白くない気持ちで「髪を整えろ」と言うと、なぜか千早の髪を整えようとした。

たぶん、あれは自分自身を気にかけることを知らないのだろう。

(道間に生まれた、黒を持たない娘、か)

少し考えればわかることだ。

道間は黒を尊ぶ。

逆に、黒以外の色を持つ者を疎む。

あの娘が道間家でのように生きていたのかなんて、あの色とあの性格を思えばすぐに理解が及ぶというものだ。

憐れな娘だと、思った。

憎い道間の娘にそのような感想を抱くことがあるなんて、千早自身も驚いたけれど、

ユキが黒を持たない娘だからだろうか。不思議と、彼女には嫌悪感を抱かない。

「あの娘が気に入りましたか？」

「そういうわけではない」

「では、どういうわけでしょうか」

珍しく、青葉が食い下がる。

切り落としたユキの髪が箒で一か所にまとめられていくのを眺めながら、千早は青葉の問いを胸の内ですすめ返した。

(どういうわけ、か)

そんなもの、むしろ自分が知りたいくらいだ。

最初はただの気まぐれだった。

いや、今も気まぐれに他ならないだろう。

ただその気まぐれが、少し方向性を変えたのかもしれない。

はじめは、道間の娘を弄べば面白いかもしれないと思った。

次に、予測と違う反応を返すユキが興味深くなり、手元に置いて観察してみたくなった。

そして今は――

わからない。

文句一つ言わず黙々と千早の下女であろうとするユキのことが、正直なところよくわからなかった。

あの娘は道間で、千早はあの娘を殺した鬼で――現在進行形でこき使っているというのに、なぜそれを平然と受け入れているのか。

考え込む千早の前に、いつの間にか片付けを終えていた青葉が座っている。

「もし、このままずっとユキを手もとに置くつもりなら、彼女の立場を明確にしてやらないと憐れです」

千早はユキを鬼にしたが、ユキは道間の娘だった。

鬼たちは道間を――『破魔家』を嫌っている。憎んでいる。

いくら人から鬼に変質させたとはいえ、道間家出身のユキを受け入れる鬼なんてそうそういるものではない。

ゆえにユキは、このままだと鬼の隠れ里で孤立する。

それだけならいいが、いつ悪意にさらされるとも限らない。

だから千早は自分の下女にし、この邸に住ませたのだ。

「珍しく肩入れするな。お前のほうこそらしくない」

「……あの娘はお館様に危害を加えませんし、その意思もないようですから」
なるほど、青葉らしい考え方だ。

生真面目なこの男の判断基準は、いついかなるときも千早なのだ。忠誠心が高いのも少々考えものかもしれない。

「立場と言うが、序列をつけるということか？ あの娘は無能者だ。鬼に変質した今でも、たいした力は持っていないだろうよ」

「序列以外にも、立場を明確にする方法はあるでしょう。——あなたの庇護下ひごかに入ればいいのですから」

嫌なことを聞いたと、千早は眉を寄せる。

だが、不快感をあらわにしても、今日の青葉は止まらなかつた。

「お館様が拾ったのです。最後まで面倒を見るべきではございませんか？」

……なるほど、自分の蒔まいた種だった。

夜——

ふと、灯台の炎が弱くなってきたのを感じて、千早は書きものをする手を止めて顔を上げた。

すると視界の端に、静かに控えているユキの姿が入る。

部屋の隅に息を殺すようにして座っている彼女を見て、千早はまだ起きていたのかと目を見張った。

そして、そういえば「下がれ」と言っていなかったことを思い出す。

筆を置いた千早は、ユキに油を持ってこさせようかと考えてやめた。

障子越しに見る外はかなり暗い。部屋の中もぐっと冷えていた。

あのように部屋の隅にいたら寒かるう。

「ユキ」

呼ぶと、顔を上げた彼女がしずしずと近づいてくる。

手を伸ばしてその指先に触れる。

やはり冷たくなっていた。

千早は一つ息を吐いて、火桶の側に寄るように彼女に命じる。

ユキは戸惑いを浮かべながらも、素直に従った。

「そこで少し温まってから部屋に戻れ」

「……はい」

ユキは恐ろしいほどに従順だ。

千早の命令に決して「否」を唱えることがない。

最近、それが少々面白くないと思うのはどうしてだろうか。

彼女に否と言わせてみたくて仕方がない自分は、ひねくれているのかもしれない。

（この女が断りそうなことといったら、なんだろうか）

温かいのが気持ちいいのか、表情が柔らいだユキの横顔を見ながら考える。ずいぶん長い間、寒い部屋の隅にいたのだろう。血色がなくなっている頬を見ながら千早はにやりと笑った。

「ユキ、訂正だ。今夜はここで、俺の懐炉代わりになれ」

さあ、さすがにこれには否と言うだろう。

どんな顔で拒否を示すのかと、愉快な気持ちで眺めていると、ユキはぱちりぱちりといったものに緩慢に瞬きをして、こくりと首肯した。

「はい」

千早は絶句した。

☆

千早様は気まぐれである。

畳の上に布団の準備をしていると、彼はもの言いたげな目で、じーっとわたしを見ていた。

何か不手際があっただろうか。

今日は天気がよかったから、布団を干しておいた。敷布も洗濯したし、何もおかし

なところはなと思う。

懐炉代わりになれと言われたときは驚いたけれど、今日はいつものより冷える。温石だと寝ている間に冷めてしまいが、人肌なら冷めることはない。

なるほど、と納得したものの、今になってちよつとだけドキドキしてきた。

千早様にとってわたしなど、炉端の石のようなものだろうけど、わたしにとっては違う。

懐炉代わりとはいえ、精悍な殿方の隣で眠るのは心臓にあまり優しくくない。

「お布団の準備が終わりました。支度を整えてまいりますので、一度下がらせていただきます」

「あ、ああ……」

千早様の許可を得て、わたしは一度、使わせてもらっている部屋に下がった。

わたしの部屋は下女に与えられるにしては豪華で、内風呂がついている。

なんでも、千早様のお邸には温泉を引き入れているそうで、内風呂には常に温かい湯が張られていた。

道間家で暮らしていたときにはお風呂になんて滅多に入れなかったのに、ここでは毎日使える。

湯は冷えた体には少し熱く感じたものの、温まるとともにちょうどいい加減に

なった。

……千早様の懐炉になるんだから、ちゃんと温まって、そして綺麗にしておかなくちゃ。

今日の昼、青葉様にお風呂に入るように言われたため、髪はそのときに洗った。髪が濡れていたから千早様が寒いだろう。高いところで束ねて濡らさないように気を付ける。

丁寧に体を洗ってまた温まり、ほかほかと体から湯気が立ち上るくらいになってからようやくお風呂から出た。

手早く白の単衣ひとえを身に着け、その上に体を冷やさないように千早様から頂いた分厚い羽織をおおって部屋に向かう。

千早様は文机ぶくろの前に何をすることもなく座っていた。わたしが部屋を出てからずっとそこにいたらしい。

「戻りました、千早様」

「……ああ、本当に戻ってきたのか」

軽く目を見張り、それから細く息を吐き出す。

「先に寝ている」

わたしの体が冷えたら懐炉として役に立たないからだろう。千早様はそう言いおい

て、寝支度をするのか、部屋の外へ出た。

もともと油が少なくなっていたらしく、布団の中に入って千早様を待っている間に、灯台の灯りがふっと掻き消える。

薄暗くなった室内に、月明かりに照らされた障子だけがぼっかりと浮かび上がっていた。

布団が温かくて、待っている間に眠くなってくる。

だけど、千早様を待っている間に眠りにつくのは大変失礼なことだ。

目をこすりながら意識をつないでいると、お風呂を使ってきたのか、髪の毛の先を湿らせた千早様が戻る。

「先に寝ていればよかったものを」

吐息交じりにそう言って、布団に潜り込む。

わたしの鼓動はどきりと跳ねたのに、千早様は平常そのもので、それでいてどこか面倒くさそうにわたしの体を引き寄せた。

「さっさと寝ろ」

ぼんぼんと背中を叩かれて、わたしは逆に目が冴えてしまう。

懐炉代わりなのだから密着してもおかしくないはずなのに、緊張で頭の中が真っ白になった。

湯上りの千早様からは、ほんのり柚子ゆずの香りがする。お風呂に浮かべていたのかもしれない。

とても緊張したけれど、柚子の香りと、ぼんぼんと、あやすように規則的に背中を叩かれるのが気持ちよくて、臉が徐々に重くなっていく。

「お前は、変な女だな……」

意識が夢の中に引きずり込まれる間際、千早様の、吐息のようなささやきが落ちた。

☆

その日。

千早様は朝から気が立っているようだった。

朝が弱いのに、わたしが朝餉の用意を終えて起こしに行ったときには、珍しく先に起きていて、褥の上に片膝を立ててぼんやりしていた。

声をかけると、すつと氷のような目でこちらを見て、無言で立ち上がる。

支度を手伝おうとしたが、いらなめと言いい、朝餉を準備している隣の部屋で待つように命じられた。

向かうと青葉様がいて、わたしの顔を見て微笑を浮かべる。

「機嫌が悪いだろうか？」

頷いていいものか躊躇ためらいつつ、小声で「はい」と答える。

すると、彼は肩をすくめた。

「毎年のことだから気にするな。……今日は、先代様の命日なんだ」

先代様、ということは千早様のお父様のことだろう。

千早様のお父様は百年ほど前に道間家によって殺されたと聞いた。

だから千早様は道間家を憎んでいて、その腹いせにわたしを鬼に変えたのだそうだ。下女として働かせることで鬱憤うづがねを晴らしているのかもしれないけれど、わたしにしてみればよくしてもらっているという印象しかない。むしろこれまでの暮らしの何倍もここは快適だ。

道間家を憎んでいるのなら、わたしの扱いも手ひどいものになるはずで、それがなため、わたしは千早様の中でお父様のことは過去のものになっていないのではないかと勝手に思っていた。

百年も昔のことで、憎しみも薄れているのだろう、と。

そう、身勝手に推察していたのだけど、今朝の様子を見るに、間違いだったと思いきらされる。

千早様はまだ、道間を深く憎んでいる。